



地域で

子どもたちを

育もう!



Kids

地域の力をいっぱい借りて

—外旭川放課後子ども教室（秋田県）—

秋田市に、1970年に住民の要望により最初の児童館が誕生した。児童館では、放課後の子どもの居場所が地域のボランティアの手によって運営されていたが、その後平成に入り、市が運営の主体となり、07年から放課後子ども教室へ移行した。

（取材・文／井上 達也）

◎さまざまに工夫されたプログラム

外旭川放課後子ども教室は、秋田市北西部の外旭川小学校に隣接する外旭川児童センター内にある。参加者数は秋田市内最大で、平日の平均は120名以上（外旭川小学校の児童数は620名）、5、6年生も約20名が訪れる。



七夕のこの日、やってきた児童は低学年から順に、思い思いに短冊に向かった。外旭川児童センターの児童厚生員兼安全管理員の中山篤子さんは、「今の子どもたちは実体験が少ないので、行事を通してさまざまなことをさせたい」と語った。七夕も、短冊を書くことに加え、細い針金でそれを取り付けることで、手でひねる動作を子どもたちが自ら考えて工夫することを意図している。また、全員が、好きなことだけでなく苦手なことにも挑戦するよう心がけている。

行事を組み合わせた「複合行事」の取り組みも盛んだ。例えば、地域の縄綱ない名人の手を借りて、子どもたちも縄を作るが、作るだけで終わらせず、縄を使ってクリスマスリースや正月飾りを作る。

毎日午後4時半からは、学年の枠を超えた球技の時間がある。この日の「全員ドッジボール」には40名の児童が集まり、30分間にわたって熱戦に



汗を流した。高学年の児童は、低学年にボールを渡し、手加減をするが、同学年には厳しくというように自然な使い分けを身に付けていく。

◎「こまち」の活動が教室を支える

「毎日たくさんの子どもたちがやってくるので、こまちのメンバーの協力は本当に助かります」と中山さんは語った。放課後児童育成クラブ、愛称

「こまち」は、外旭川児童センターを支える地域の協力ボランティア団体で、児童が多い日には手伝い、また毎日花壇の水やりをする。

七夕のこの日は、青いエプロンを着けたメンバー10名が、子どもたちとともに短冊を書き、飾り付けをした。子どもたちを見守る目は温かい。「ルールを守れないときには親のように叱ることもあります」とは中山さ



んの言葉である。また、餅つきには近所の農家が杵や臼と餅米を、16ミリ映写会では映写技師が映写機を、そしてお茶の教室には裏千家の先生が道具をそれぞれ持って駆け付けてくれる。

◎子どもが一番ほっとできる場所

「放課後子ども教室は、子どもにとつての赤提灯みたいなもの」と中山さんはユーモラスに語ってくれた。学校帰り、帰宅前に、いつでも、好きなときに立ち寄れる放課後子ども教室で、子どもたちは心を許し合い、思いっきり遊ぶ。

帰り際、最後まで一生懸命書いていた1年生の女の子が、自慢げに短冊を見せてくれた。本当に楽しそうな表情が印象に残った。



短冊に願いを込めて…

